

## 素顔のイラン

在イラン日本国大使館附属日本人学校 教諭

大河原 崇視



みなさんは「イラン」という国からどんなイメージをもつだろうか？「砂漠」「イスラム教」「ペルシア絨毯」…。社会科の先生であれば、「カスピ海」「カナート」「油田」「イラン・イラク戦争」「ペルセポリス」などを連想するかもしれない。多様な自然に恵まれ、歴史的遺産も数多く点在する国、それがイランだ。しかし残念なことに、多くの人は、イランという国をマイナスなイメージでとらえることが多い。「治安が悪いのでは？」「戦争しているんじゃない？」これは、実際に私が耳にした、イランについての日本人の感想である。

私の勤務する在イラン日本国大使館附属日本人学校（テヘラン日本人学校。以下、本校）には17名の児童生徒が在籍し、日本の学習カリキュラムに加え、イランの文化や風習などを学びながら、毎日元気に学校生活を送っている。本稿では、学校生活を切り口に「素顔のイラン」について語ることで、一人でも多くの方に、イランについての正しい認識をもってもらえれば、これに勝る喜びはない。

本校では、小学生から中学生までが同じ学び舎に集い、授業を受けている。子どもたちは兄弟姉妹のようにみんな仲がよく、休み時間になると誘い合って全校児童生徒が校庭でサッカーや鬼ごっこをしたり、一輪車の練習をしたりしている。面倒見がいいことは、何も彼らだけに限ったことではない。イラン人は、私たち外国人に対してとても親切で、気さくに声をかけてくれる。昨2012年度、クラブ活動でイラン人にインタビューすると

いう取り組みを行った。内容は、「東日本大震災被災地へのメッセージ」。遠く離れた国、日本で起こった地震に対してのイラン人の感想に興味があった。子どもたちは授業で学習しているペルシア語を使いながらインタビューを行い、多くのイラン人からメッセージをもらった。そのほとんどが、「自分のことのように悲しんだ。」「早く復興することを願う。」といったものだった。私も、赴任して1週間後に、街中で出会ったイラン人に同様のことを言われ、驚いたことがある。「お前の住んでいたところは大丈夫だったか？」イランでも、数年前に南部の都市・バムで大地震が起き、壊滅的被害が出た。しかし、恥ずかしながら、その地震があったことを、私は赴任後にイラン人から聞いて初めて知った。イランには、「お客様は神様の友達」という言葉があるという。私たち外国人に対するおもてなしの精神と、優しく気遣ってくれたイラン人を、私は心から尊敬したい。

昨年度、本校中学部生徒6名は、1年をかけて進路学習に取り組んだ。日本の勤務校で長年取り組んできた進路学習を、イランの地ならではの方法で実践できないかと思ったのがきっかけである。なかでも、職場体験は私が子どもたちに何としてでも体験させてやりたいことだった。テヘラン日本人会の全面協力を得て、6名の生徒たちは、自らが希望する職場を選択し、メールや電話で交渉し、担当者の方と打ち合わせを行い、体験に向かった。テヘランに駐在されている方は、欧米諸国による経済制裁等の関係で、年々減少の一途をたどっている。しかし、人数が少ないからこそ、また不便さを感じているからこそ結束はとて強く、学校の取り組みに対しても理解を示していただいた。事前学習では、商社の方にビジネスマナーを



イラン人にペルシア語でインタビュー



電子部品の基板から部品を取る作業を体験しているようです。イラン人技術者から、作業の手順を英語で教わりながらの体験である。



宿泊学習でのペルシア絨毯づくり体験（ヘジャーブをかぶって体験をしているのは本校6年生女子児童。玄関マットサイズのシルク絨毯を1枚つくるのに、糸を結ぶ作業をおよそ50万回繰り返す！有能な職人は、2〜3か月で1枚を仕上げる）。

教えていただき、体験学習では、日系電器メーカーでの製品修理体験（上写真左）、JICAのODAプロジェクト視察、日系自動車メーカー代理店での整備体験、日本語補習授業校での授業体験、イラン警察や日本大使館の業務見学など、日本では体験できない魅力的なプログラムを多数用意していただいた。また、日本人会ではないが、イランエアーでは客室乗務員訓練センターで体験をさせていただいた。こうした日本人会との強い結びつきは、教科の学習にも拡大し、小学校社会科での放送スタジオ見学、自動車工場見学などでは子どもたちが生の現場を見られることで、学習内容をより深く知ることができた。

また、昨年度、本校は学校を挙げて「イラン発信」のテーマのもと、テヘラン市内各地に校外学習に出かけ、イランの歴史や伝統文化、人々の生活のようすについて学習を重ねてきた。

イランを代表する伝統工芸品といえば「ペルシア絨毯」だろう。歴史は古く、紀元前から生産されていたことがわかっている。地方ごとに伝統的な図柄や色、素材があり、熟練された絨毯職人（ほとんどが女性）によって1枚1枚手織りで織られている。シルクの絨毯は見る方向によって濃淡があり、細かい図柄と配色が特徴である。職人たちは、慣れた手つきで瞬く間に経糸に糸を結びつけていく。詳細な設計図があるのだが、ほとんど見えていない。まるで頭の中に図案が入っているかのようだ。一方、ウールの絨毯は伝統的な模様（花や木、動物など）が多い。ウールの絨毯をつくっている人は、遊牧民が多く、彼らのつくる絨毯には設計図は存在しない。見たこと、感じたことをキャンバスに描くように、絨毯に織り込んでいくのだ。イランで絨毯づくりが盛んになった背景には、原料となる羊毛（イラン高原などの乾燥帯）や生糸（カスピ海沿岸の温帯）、天然の染色材料が容易に入手できたこと、古来よりシルクロードを

通る交易品として付加価値が高かったこと、そして絨毯以外のさまざまな工芸品にも共通する、イラン人の手先の器用さなどが挙げられよう。子どもたちは、絨毯づくり体験や絨毯博物館、絨毯販売店の見学を通して、改めてペルシア絨毯、そして絨毯職人の素晴らしさを感じ取ることができた。

もう一つ、イランを代表するものといえば、イスラム教がある。イランは、イスラム教シーア派を国教とする国であり、私たち外国人に対してもイスラミック・コードが適用される（小5以上の女子は、校外ではヘジャーブという頭巾を頭にかぶらなければならない）。日本ではあまり馴染みがない宗教であるがゆえに、誤った認識をもたれることも少なくない。しかし、イスラム教の教えは怖くもなければ、前近代的でもない。むしろ、理にかなっていることも多い。例えば、イランのバスは、男女同席ができず、男子は前、女子は後ろ側に座ることとなっている。一見不便のように思えるが、混雑した車内では痴漢の被害防止になる。また、イスラム教の五行の一つに「断食」がある。私も、赴任1年目の夏に12日間だけ体験したのだが、日の出から、日没まで、一切の飲食、喫煙を絶つ。「何で、真夏に…」と思うなかれ。断食の本当の目的は、飲食を絶ち、苦渋を味わうことによって、弱者や貧者の気持ちを知り、施しをすることにある。苦渋の先に見えたもの…それはどの渇きを癒す1杯の水と、空腹を満たす食物への感謝の念にほかならなかった。

イランに2年間暮らし、多くの新しい発見があったが、なかでも「友情に国境はない」ということを強く感じた。言葉や宗教、生活習慣が異なっても、同じ人間として喜怒哀楽をともし、感動を共有できたことは何ごとにも代えがたい体験である。多くのイラン人から学んだ「素顔のイラン」について伝えていくことこそ、彼らへの恩返しであると感じている。